



戦後75年

未来を生きる皆さんに

私たちが伝えたいこと

～戦時中の生活から学ぶ～



戦後七十五年

「未来を生きる皆さんに私たちが伝えたいこと」

〈戦時中の生活から学ぶ〉発行に当たって

青梅市長 浜 中 啓 一

昭和二十年八月十五日の終戦から七十五年の歳月が流れました。

先の大戦において、尊くもかけがえのない命を失った人々とその御遺族の方々に対し、心より哀悼の意を捧げます。

私たちは、先人たちから多くのことを学び取り、平和の大切さを認識するとともに、悲惨な戦争の記憶を風化させることなく、二度と戦争を起こしてはならないことを後世に伝え続ける必要があります。

世界に目を向けますと、今なお紛争やテロといった悲惨な行為が絶えることなく続き、多くの尊い命が奪われ、人々の心に深い傷を残しています。また、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、新たな脅威となつて、世界中を震撼させております。こうした困難を乗り越え、すべての人が自分らしく、平和で安心して暮らせる世界を実現していくことは、人類共通の願いであります。

青梅市は、世界連邦平和都市宣言および非核平和都市宣言を行い、全人類の恒久平和と核兵器や戦争のない平和な世界を希求することを宣言し、平和事業を推進するため、積極的に取り組んでまいりました。

この戦争体験集につきましても、戦争を知らない世代に向けた、貴重なメッセージとして編纂したものであります。多くの方にご覧いただき、争うことの悲惨さや平和に生きていくことの大切さを感じ、考えるきっかけにいただけたら幸いです。

この冊子を発行するにあたり、当時を生きた方々の記憶をたどり、苦しく辛い思い出や青春時代の喜びや悲しみなど、貴重なお話、お言葉を頂戴いたしました。御協力いただきましたすべての皆様に心から感謝申し上げますとともに、ますますの御健康と御多幸をお祈り申し上げます。

目次

記憶	樋口 光江	1
戦時の青梅と私	田中 庄次	5
共に生きる	井上 一郎	7
私たちの女学校生活	濱中 知子 田辺 俊子	10
女子てい身隊	木崎 ハナ	12
私の体験した戦争下	本橋 文子	14
平和を願って	持田 昌治	17
「ゆずり兼によせて」より「戦禍のふるさとを思う」	福島 和夫	21
あとがき		24

記憶

樋口光江 九十二歳

第二次世界大戦が始まったというニュースをよく覚えて
います。女学校一年生の時でした。朝、仲町や上町辺りの
家のラジオから道路まで聞こえるくらいの音量で軍艦マー
チを流しているのです。

「マキノスエコちゃん」という子だったかな、亡くなっ
たその子は私よりも年下の、妹と同級（当時十三歳）で、
同じ仕事に行く途中だったように思います。空襲で飛行機
が来たので先生は電車を降りなさいと仰いました。その子
は奥多摩方面から第九高女（第九高等女学校）まで来てい
て、下車することなくそのまままで行ってしまったので
すね。男性の脚を貫通した弾がマキノさんに当たったので
す。電車が停車し、その子を近くのお医者さんへ連れて行
きました。名札には名前と血液型が書いてあり、怪我をし
たその方はO型、妹もO型だったから「同じ血液型だね、
すぐに血液を提供してあげなさい」と言われ、病院へ行き

ました。でも病院についた時には、残念ながら、もう息絶
えていたそうです。可哀そうで抱きついて泣いたと言っ
ていましたよ。妹たちにとっては忘れられない記憶になっ
ているのではないのでしょうか。

私は青梅市内の織物工場の跡にできた軍需工場にいまし
た。そこに昭和飛行機の人が持ってきた木工機で、
尾翼の部品を作っていました。ほかにも、学校の裁縫室の
中に運び込まれた電動ミシンで、飛行機のタンクの間詰
めて使う部品を作りました。飛行機が空中分解したら気の
毒だからと、それはそれは丁寧に作りました。勉強どころ
の話じゃなかったですね。

お昼は榎戸の食堂で食べるのですが、豆かすが入ってい
たり芋が入っていたり、呉汁というのも出ましたね。それ
でもご飯が食べられるのだからありがたかったですよ。給
料が出たと言うのですけれど、もらった記憶はありません。
たぶん女学校の月謝とか学校に納められていたのではない
かと思います。戦争最中ですから、自分たちで縫ったもん
ぺを履いて過ごしていました。女学校なのでスカートで通

っていたのですが、それではうまく働けないので、学校にもんぺを履かせてくれないかと先生に嘆願書を出し、それから日常的に穿くようになりました。

よく長岡（瑞穂町）まで農家のお手伝いに行きました。

先生が生徒を三人ずつくらいのグループに分けて、麦踏みや、さつまいもの蔓返しなど、できることをやりました。おやつも出してくれました。茹でたじゃがいも、さつまいも団子を作ってくださいるとか。お腹を空かせていたので、とても嬉しかったです。それを楽しみに働きました。水筒と防空頭巾は肩に背負って持ち歩いていました。農家の男性はみんな出征してしまい働き手がいなかったから、大変だったと思います。父もよく千葉の方まで食べ物を買に行っていました。近所で車を持っている人と集まって行って買いました。出征している家庭の分を、ご近所同士協力をして買に行きます。お金で物が買えなかったから、料理屋さんでは大きな鍋を出し、傘屋さんでは番傘を出し、衣服類も物で交換していました。

当時は衣料切符というのがあって、たまにそれで服を買

いました。パンツやシャツは女学校の先生に作り方を教わり、全部自分で縫いました。運動靴もクラスで五、六足程しか入ってこなかったから順番で譲り合って、お古でもサイズが小さくなくても何でも大切にしました。『欲しがりません、勝つまでは』で物が豊富にあるわけでもなく、自由な思いをしたけれど、その中でも何か楽しみを見つけて過ごしていました。

戦時中の楽しみといえば、子ども向けの映画鑑賞や、青梅でのお祭りです。娯楽が全部なくなったわけではありませんでした。幼少期に楽しかったことがたくさんあったわけではありませんが、それでも縁日は楽しみのひとつでした。戦時中も出店がありましたね。暮れの晦日市も派手にやっていました。たくさん量はなかったけれど年始に必要な物を売っていました。

印象に残っているのは、品川から青梅へ疎開学童が来たことです。終戦後すぐに帰って行きましたが一年近くは来ていました。お寺や公会堂が開放され、小学三、四年生の子が四十人程来ていました。

夜になると空襲があり、子どもたちは東の空を見て「あれは夕焼けじゃないね、自分たちの住む町が爆撃されているのかなあ」と心配そうにするのです。

面会の日には、両親が我が子にと少し食べ物を持って来ます。でも皆の親が来てくれるわけじゃないからね。そういう子たちに少し食べ物を分けようにも、下痢をする子もいましたし、おねしよをする子もいました。布団は頻繁に洗えるわけでもないのです、シラミがすごく、背中がかぶれる子もいました。

昭和二十年終戦の年、本郷にある師範学校からの入学案内の葉書が届きました。三月に大空襲があったから四月の入学は見送り、七月に式を行うという内容でした。嬉しかったのを覚えています。八月十五日、そこで終戦を迎えました。校庭に集まりなさいと放送がありました。皆、泣いていました。でも放送がよくわからず、なぜ泣いているのかと先生に聞くと、「戦争が終わったんだよ」と一言告げられました。

終戦後しばらくして、疎開に使っていた旅館が空き家に

なり、そこを寄宿舎として使うことになったのです。私は家が遠かったので入寮させていただきました。そこでの生活がまた大変でしたね。食事当番になった者は、寄宿舎の職員と遠くまで食料品を買ってきて準備と片付けをしたので、授業に参加できないくらいでした。お手洗いの水汲みなども自分たちでしなくてはいけませんでした。食料を確保するのも大変で、お昼ご飯はサツマイモ一本分を蒸かしただけというようなこともしばしばあります。号令で学生たちが集まると、あさましいけれど、皆少しでも大きなサツマイモを確保しようと必死でした。

私は日中戦争から戦争を経験しているので小学校三年生からずっと戦争でした。生徒よりも、教育勅語で意に浴がないことも一生懸命教えなきゃいけなかった先生のほうが大変だったのではないかと思います。

戦争は、人間の力で、起こそうと思わなければ起こりません。自然災害とは違うのです。



紙風船「欲しがりません 勝つまでは」
(八王子市郷土資料館提供)

薬屋さんのおまけで配布していた紙風船です。
当時は今のように薬局が豊富にあるわけではなく、「置き薬」を利用している家庭も多かったようです。年に1～2度訪問してくれる薬屋さんからもらう紙風船は、玩具の少ない子供たちにとっては、楽しみのひとつだったのではないのでしょうか。
薬の宣伝や童謡、漫画のキャラクターが掲載されていた紙風船も、戦時中は売薬統制もあり、このような絵柄のものが多く利用されたそうです。

当時発行された「小学2年生」
(八王子市郷土資料館提供)



集合写真「昭和19年7月調布初等科5年生」(田中庄次さん提供)

「みんなの足元を見てごらん。靴なんて手に入らないからみんな下駄をはいているでしょう。」
田中さんが、そう話しながら当時の様子を教えてくださいました。地元の子供たちと疎開してきた子供たちで、生徒数がほぼ倍になりました。地元の子供も疎開してきた子供もみんなで協力しあって戦時下の厳しい生活の中、毎日過ごしました。

戦時の青梅と私

田中庄次 八十七歳

当時小学校六年生。その頃は勉強している暇もなく、出征兵士で男手が足りない家庭に勤労奉仕という形で農家のお手伝いに行っていました。当時軍需工場はたくさんあり、今の立川から西立川にかけてあったのが立川基地、昭島にあったのが昭和基地、拝島から福生にかけてあったのが横田基地、今の武蔵野市には中島飛行場がありました。長淵地区は新井鉄工、川口鉄工、織物工場なども軍需工場となりました。飛行機の部品や銃弾を作ったりしていました。勤労働員の生徒や女学校の生徒が来ていたようです。

終戦近くなり、八王子や京浜辺りがよく爆撃対象になりました。東京の都心が狙われたのは三月十日ですね。でもその日だけです。青梅にも一度爆弾が落ちました。私が知っているだけでも、飛行機は三機落ちました。機銃でやられたのは青梅線内、それから小作の変電所もやられました。爆撃に遭ったことは戦時中で一番恐ろしい経験です。

長淵に疎開していた昭和飛行機は、毎日のように機銃弾にやられていました。毎日機銃弾で撃たれそうになります。日常的に危険な目に遭うと不思議とだんだんと怖いという感情は消え、自分のところへは飛んで来ないだろう、狙われるなら工場だろうと思っていました。ですが、飛行場自体を積極的に攻撃することはあまりありません。それはアメリカ軍がある程度の勝算のもと、後に飛行場を使わせてもらおうという狙いがあったからかもしれません。

当時、米はほとんどなく、満足にご飯が食べられることはありませんでした。米の配給はなく、雑穀やサツマイモばかりでした。さつま団子の中に塩を入れて食べたりもしましたね。うちは農家だったから配給どころか、むしろ出せと言われ、サツマイモやカボチャを作っては取られました。蚕もやっていましたが桑畑を壊して麦でも作れと命令されていました。

昭和十八年を過ぎると、紙がないために教科書もまともに買えず、卒業生の教科書を借りて勉強していました。でも毎日のように空襲があって、サイレンが鳴るので、登校

しても帰れと言われる日々でした。

高等科の生徒は銃剣の扱い方の授業がありました。どこ
の学校にも指導のために配属将校という名目で将校が来て
いました。正式な軍装をしてやって来て軍事指導をするの
です。疎開の人がいっぱい入って来たことや教師が少なか
ったこともあり、一クラスは七十人くらいいました。でも
昭和十九〜二十年にかけて日本の軍が駐留、三棟あった校
舎の内一棟を持って行かれてしまいました。講堂も福生の
飛行隊が来て駐屯してしまつたので、学校として機能して
いた校舎はたったの一棟だけでした。終戦後学校にいた兵
隊さんは全部撤退してあつという間にいなくなつてしま
いました。昔の学校は、誰かが代わりに先生をすることがで
きて、行事や正式な授業はできませんでした。

昭和十六〜七年頃からの戦時中は、巡回映画が年に二回
くらい、学校の校庭に来ていました。流れる映画は戦争系
の内容や農家の食料調査についての内容のものばかりです。
初めは勝ち戦の明るい内容のものが多かったですがそれ以
外の映画というのはなかったし、最後に映画を観たのは昭

和十九年の春だつたと思います。あとは昭和二十一年に『農
家の夕べ』というようなタイトルの巡回が来ました。楽し
みと言つたらそれくらいしかなかつたです。

終戦は親戚より借りてきたラジオで玉音放送を聞きまし
た。雑音は入るし、何を言っているか分からないし、今の
ラジオほどちゃんと聞こえません。後になって、負けた事
を知りました。敗戦の放送を知ると、すぐに小学校に駐屯
していた陸軍砲兵部隊や航空部隊が素早く小学校から撤退
していきました。勤労働員に行つていた高等科の生徒も学
校に戻り、以前と同じ学校生活が始まりました。戦時中疎
開で来た、学童、生徒が終戦を知るとすぐに帰郷が始まり、
各学年の人数も少なくなりはじめ、私のクラスでも15人
ぐらいのクラスメートが、学校を去っていき、3月の卒業
時には、元の45〜50人クラスになつてしまいました。
駐屯していた兵隊が使つた空き部屋の掃除を高等科の生徒
をはじめ、私達6年生も手伝い、元の教室に戻りました。
兵隊たちに荒らされた校庭には、あちこちにタコソボがあ
り、その埋め戻し作業やら、砂場の修理などしたことを

覚えています。校庭の西側に鎮座していた奉安殿も終戦間もなく解体され、跡地が校庭の一部となりました。工場疎開で現在の長洲二丁目に作られた、昭和飛行機会社飛行機制作工場も終戦間もなく閉鎖されました。数百人いた従業員も終戦間もなく閉鎖され、跡地が校庭の一部となりました。工場疎開で現在の長洲二丁目に作られた、昭和飛行機会社飛行機制作工場も終戦間もなく閉鎖されました。数百人いた従業員も終戦間もなく閉鎖され、跡地が校庭の一部となりました。

共に生きる

井上一郎 八十五歳

開戦の記憶はありませんが、終戦のラジオ放送は子どもながらによく覚えていました。

戦争中での出来事は、本土で空襲があつた頃から覚えてあります。小学校低学年でした。飛行機が入ってくると、情報を持っている軍隊がそれを地方に全部流します。そうするとまず警戒警報が鳴り、爆撃のB29がやってきます。学校で警戒警報が鳴ると授業は打ち切り、家に帰れと言われます。普段は座布団の代わりに使っていました。防空頭巾は必ず学校に持って行っていました。

小学生に勤労奉仕はありませんでした。中学生や高等女学校の生徒は勤労奉仕に行っていたと思います。今でいう高校生の人たちです。大学生は軍隊に行っていました。ただ、勤労奉仕がなくとも国に協力をしないといけませんでした。

戦争が始まって、徐々にガソリンがなくなっていきました。

た。当時は秋田県で石油の採掘がされていましたが、採掘量が少なく、インドネシア辺りの油田まで進出しました。ガソリンの代用品を作るために、松脂が必要で松の根っこを父と山にとりに行き供出しました。薪や燃料を満足に使えなかったので、お風呂も近所の家と交代制で入っていました。

終戦近くになり、自分が通っていた学校に軍隊が駐屯しました。軍隊も食料がなくなっていたから困っていたのでしよう。兵隊の食料にするのでどんぐりを拾って学校に持って行っていました。あとは鉄や金属がなくなっていました。たために橋の欄干、お寺さんの鐘等を供出していました。個人では金ボタンというのを国へ供出していました。

親戚や知り合いの人たちが青梅に疎開してきていました。うちの父親は新聞記者だったから知り合いも多く、農家とも知り合っていたから、多少は食料を恵んでもらえたりしました。ですが、酷いときにはまともに食べ物もなく、まづご飯なんてものは食べられません。お弁当はサツマイモ一本食べられたらいいほうでした。中には何も持ってこら

れない子もいました。

今では考え難いことですが、当時は子どもだから何もしないわけではなく、子どもも家計を助けていました。国の方針か行政の方針かはわかりませんが、家で何か食物を作り、自給自足の生活をするよう促されていたように思います。一般の家庭では畑なんてないから、土地が広いところは庭を潰して畑にし、野菜類を作っていましたね。

そんな日常の中に米軍の飛行機が飛んできたりするので。消防団の指導のもと防火訓練もしていました。いざ焼夷弾なんかで爆撃されたら火事につながるので各家庭コンクリートでできた防火用水を持っていました。

ある夜のことです、南の空を横切る赤く光る物体を見ました。これは爆撃前に照明の役割をする照明弾だ。これから青梅も爆撃されるのかと思ったら、そうではなく、日本軍に撃たれて落下していくアメリカの爆撃機B29でした。その後このB29は吉野村（現青梅市）の山中に墜落しました。

その後しばらくしてから墜落現場の付近に飛び散った飛

行機の窓に使っていた風防ガラスを拾いに行きました。

飛び散った風防ガラスの破片を擦るといい香りがするのを子供たちは遊びにしていました。

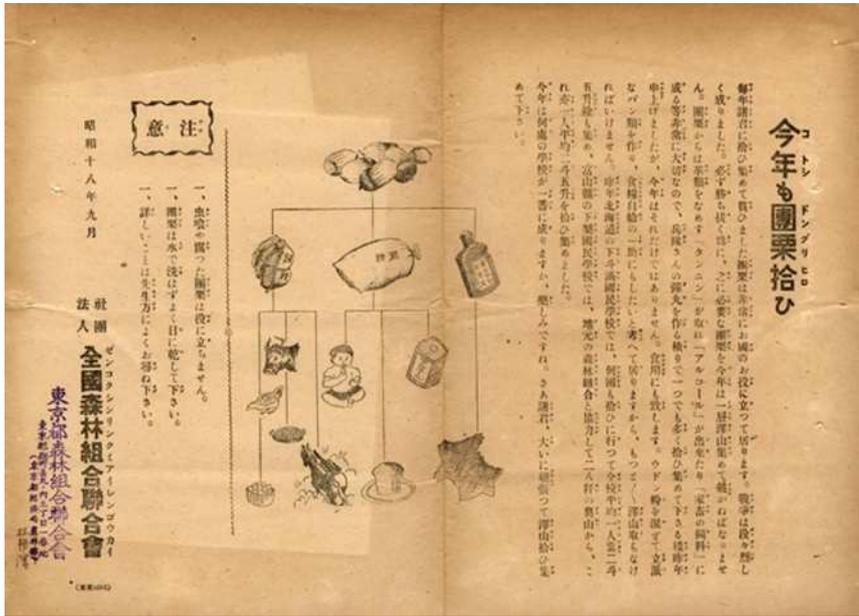
その頃の楽しみの一つに、巡回映画があったのを覚えています。この辺りは第一小学校に来ていました。校庭の真ん中にスクリーンを置いて両サイドから観られたのです。近所の友達と集まって見に行きました。

トランプやみかん釣りをして遊ぶこともありました。年齢も関係なく、兄弟その友達、みんなで遊びました。上の者は下の者に教え面倒を見る、下の者は上の者から学ぶという習慣がありました。いわゆる親分子分の関係のようなものです。今の時代には親分子分の関係がないように思います。

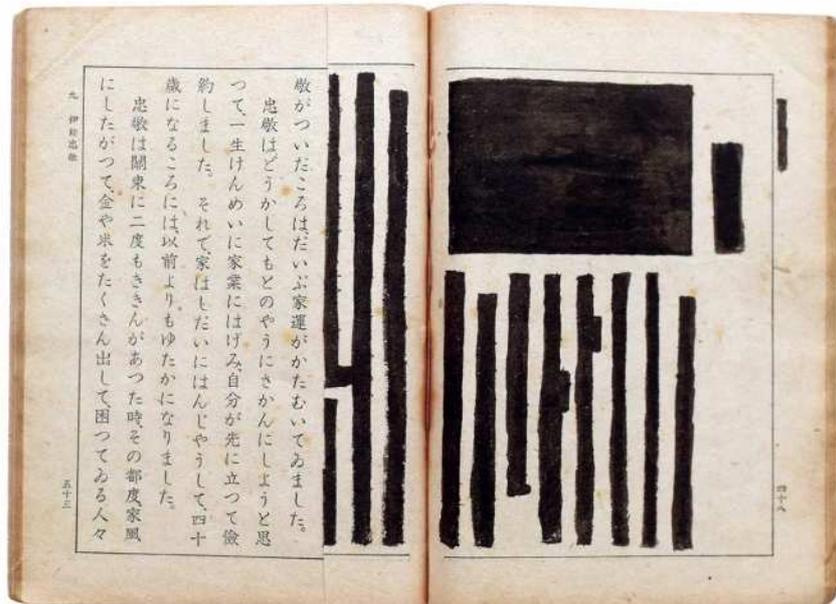
終戦を過ぎてから野球をして遊んでいたのですが、革のグローブは使えず、布切れでできたものを使っていました。近所の工場に米軍基地で使われていた皮のグローブが置いてあって、それを借りて遊びました。みんなの前で使うと貧富の差ができます。でもそんなことでいじめが起きるわ



けでもなく、どんなものを使っても、親が一生懸命働いていてからと感謝をして生きていました。そしてご近所さんと助け合ってみんなで協力し合って生きていました。生活レベルの格差を気にせず、蔑むこともなく、皆が協力をして大変な時代を生き抜こうとしていたのは、戦時中唯一よかったと思うことです。物はなかったけれど心はかよいあっていました。



ドングリ採集呼びかけのチラシ
(八王子市郷土資料室提供)



初等科修身 四 (八王子市郷土資料館提供)
「墨塗り教科書」戦時中に使用されていた教科書を敗戦以後に文部省の通達を受け、一部黒塗りをして使用しました。戦争の意識を高める内容や逸話などは塗りつぶしの対象となりました。

私たちの女学校生活

濱 中 知 子 九十二歳

田 辺 俊 子 九十一歳

私たちは戦時中から同じ青梅の第九高等女学校に在籍していました。戦争前は、徐々に生活の様子が変わっていきましましたね。友達と遊ぶこともなくなっていき、若い人は動員や出兵でいなくなっていました。戦争が始まってすぐは負けるなんて全く思っていないませんでした。もしそんなことを口に出したりしたら・・・なんて考えられません。日頃から長刀を持っている人もいたし、それで戦う練習をしたりもしました。今思うと何の役にも立たないですね。

私たちは女学校の学徒動員で千ヶ瀬にあった軍事工場へお手伝いに行っていました。そこで飛行機の部品に不備がないかを検査する仕事をしていました。多くはなかったですが、お給料もいただきました。学校とは名ばかりで、勉強をすることなく働きにばかり出ていましたね。青梅駅を境にして分けた地区によっては、立川や昭島の工場に行っ

ている人もいました。御嶽山から通っている人たちは、ケールもないので歩いて通っていました。行きも帰りも二時間歩くのだから気の毒でしたね。

アメリカ兵の飛行機が飛んでくると川沿いにある林に避難しました。避難できる場所があったおかげで皆大きな怪我なく過ごすことができましたが、山羊だか羊だかが機銃掃射にやられたりしたみたいです。低空飛行をする飛行機から見えるアメリカ兵の顔はものすごく怖かったですね。

その頃の私たちは、飛行機が来ても生きることには必死だったので平気というか、怖さに麻痺していたような気がします。今、当時を想像したほうが恐怖でいっぱいです。

それでも空襲警報が鳴り響いた日々は恐ろしかったですね。青梅はそこまで大きな被害はなかったものの、八王子や都心部が狙われるたびに不安で仕方なかったです。噂では「次は青梅に来るぞ」と何度となく言われていました。その度に父は「なんで今逃げないんだ、早く逃げろ」と言っていて夜遅く避難し、まともに眠ることもなく朝学校に行かなければいけなかったのです。つらかったですね。自分の家

にも防空壕を作っていました、より安全な場所に皆で避難していました。そこでは電気は一切使ってはいけないと言われ不憚な思いをしました。

当時は食料品があまりなかったのも、各家の庭に枝豆やカボチャやサツマイモを植えて自分の家で食べていました。何にもない時代でしたからね。米粒があればいいほうでした。ですが明日食べようと用意していたカボチャが翌日になると全部盗られていることもよくありました。避難先と自宅が離れていたから仕方がないですね。女学校からも、何か作ってくれと言われ野菜を収穫しては持って行くということをしていました。動員先の工場は小さかったので食事も質素で、米なのか豆なのかわからないようなご飯と、味噌に菜っ葉が入った汁物が出ました。それが戦後まで続きました。

終戦は工場の広場に集められて放送を聞きましたが、何を言っているかはわからず家に帰ってからやっと知りました。でも負けたとは誰も、絶対に言いませんでした。終わったということだけ聞かされました。

終戦後、お稽古や学校は復帰させてもらうことができました。終戦後の電車の中は凄まじい乗車率で、食料調達に出かける者、闇市に出向く者、通勤・通学に利用する者で溢れていました。経済成長とともに徐々に元の生活に戻っていきました。戦後になり、高価なものを買ったたりして、「ああ楽しいな」「こういう自由なこともあるのかしら」と思いましたね。戦時中は楽しいという感情もなく、それどころじゃなかったです。

今は良い時代ですね。食べ物でもなんでも、豊富にあることは当たり前です。私たちは戦争という時代を生き苦しみ味わってきたから、今のこの時代は、とても自由で良かったと思います。戦争で負けたのにこれだけ豊かな生活ができるというのはすごいことだと思いますよ。今は闇市に行かなくてもコンビニで何でも手に入ります。だから今の若い人がまた幾年か先に苦しみに遭った時、それに耐えられるのかと考えてしまいます。私たちの代だから耐えられたのかなって思いますね。

女子てい身隊

木崎 ハナ 九十四歳

成木村村立北小曾木小学校（後の青梅市立第十小学校）を卒業し、しばらく実家で家業の手伝いや裁縫をして過ごしていました。

兄弟をはじめ周り同級生などが、召集されるようになり、不思議には思いましたが、この時はまだ戦争の恐ろしさや激しさを肌で感じることはありませんでした。

その後、十七歳を過ぎたころ、八王子市にあった「女子てい身隊」に行かされました。勤労動員です。

「女子てい身隊」では、同じぐらいの年齢の女子が五十人ぐらい召集されており、私はミシンを使って、軍服に袖を付ける担当で、来る日も来る日も流れ作業を行っていました。

住み込み（寮生活）で、他の地域から来た先輩といつも一緒に生活をして、私は一番年下だったこともあり、みんなに可愛がってもらいました。十代や二十代の若い仲間が

たくさんいて、つらいこともありましたが、むしろ楽しい思い出の方が多く残っています。

食事も一日三回きちんと用意され、日曜日にはお休みももらえて、不自由と感じたことはありませんでした。

空襲警報が発令される回数が増え、私も戦禍が激しくなっていることが判りましたが、幸い、怖い思いはしたことはありません。

八王子市内の空襲がひどくなり、てい身隊は、解散となりました。

私の居た場所は、どこだったか記憶にありませんが、高台にあり、空襲の被害は免れました。

施設が閉鎖されるまで、一年と十一か月奉公し、実家に帰ることになったとき、施設にあった「ミシン」を持って行っていいと言われ、ほしくてほしくてたまらなかったけど、重くて、家が遠いため、持って帰ることが出来ずとても残念でした。

また、帰りに素足で多摩川を渡らされ、凍えるように冷たかったことを覚えています。

戦争へ行った兄弟は、運よく無事に帰ってきました。また、近所の同級生は、大けがをして帰ってきて、お見舞いに行きました。

私が憧れていた先輩は、戦死されたと聞き、その時は悲しいと感じましたが、仕方がないとも思っていました。

今から考えると、二十歳そこそこで、所帯を持つ前になくなって、何ともむごい話です。



国民精神総動員運動ビラ
(八王子市郷土資料室提供)



日立航空機発動機組み立て班 (八王子市郷土資料室提供個人蔵)

勤労働員の府立第四女学校の生徒さんです。

木崎さんのお話と同様に、来る日も来る日も発動機の組み立ての流れ作業をしていたのでしょう。

私の体験した戦時下

本橋文子 九十歳

戦争・事件当時は十三歳。女学校一年生の時に学徒動員で昭島の昭和飛行機に働きに出ました。終戦を迎えたのは十四歳の時です。

友人の牧野さんを亡くしたあの日のことは忘れられませんが。あの日私は、昭和飛行機に行くので奥多摩から来る電車を青梅駅のホームで待っていました。空襲中でアメリカの飛行機が飛来、奥多摩方面から電車で来た人たちに先生が「降りなさい！」と言いました。でも彼女はきっと先生の「降りろ」が聞こえなかったのでしょう、降りることなく電車が青梅駅を出発して東青梅駅を出たところで撃たれました。アメリカの飛行機からの銃撃に二人が被害に遭われましたが、男性は脚を貫通、彼女は、その撃たれた男性の脚に当たった弾が跳ね返ったことにより怪我をしました。出血多量で輸血が必要な状態でした。事件現場付近にいた女学生で彼女と同じO型の人現場に行って輸血するよう

にと命じられ、私は同級生と先生と急いで駆け付けました。現場付近には恐らく歯科医だと思われる医師がいて、負傷した彼女を診てくれたようです。ですが、出血多量だからどうすることもできず、私たちが駆け付けた時にはやっと息をしているくらいでした。「頑張れ、頑張れ！」と声をかけましたが、私たちの目の前で彼女は息を引き取りました。私と同級生はその場で泣き崩れました。

その頃学校では、勉強なんて全然しませんでした。十三歳だから働けるなんて状態ではないけれど、先生も一緒に、百人程度で工場に行きました。府立第九高等女学校の一年生は軍需工場に動員で行っていました。私たちの担任は女性の体育の先生で、その先生がみんなを工場まで引率してくれました。軍需工場では、ダグラスの輸送機の燃料タンクに、金の板のようなものを使った蓋を作っていました。それができると飛行場へ持って行くのです。国民総出で仕事に従事しましたね。毎日、土日も休みなく働いていました。それでもご飯は出ました。おにぎりはちゃんと持たせてくれたのです。当時は純粋な白米ではありません

でしたが、健康に気を遣ってかご飯に茶色い何かを混ぜたものが出たりもしました。戦時中なので白米はまともになかったですね。工場だから作業着も出しましたが、風通しはいいのかもしれないけれど生地も良くはなかったですね。

空襲になると電車が止まってしまうので、軍需工場から歩くんですよ。小作まで来ると青梅線が動いているから、そこまではどうにか歩かなければいけません。朝八時〜九時頃に家を出て夕方五時くらいまで働き、そこから青梅線が止まっていれば歩いて帰ってくるわけです。青梅線の線路の上を歩くのですが、長い時間本当によく歩きました。そんな私を見て母親が、「なにかあったら道中食べなさい」と豆を煎ったようなものを袋に詰めて持たせてくれました。

軍需工場での働きに、少しですがお給料も出ました。封筒に入れたものを直接先生が分けてくださいました。私のお給料はお小遣いにはせず、母親に預けていましたね。

空襲があるこの辺の人は永山に逃げました。辺りの空一面が真っ暗になるくらいB29がやってきました。八王子

方面から青梅の方に廻って飛んでくるのです。永山に防空壕がありました。壕の中は浅く屋根がありません。私が立つとちようどくらいの高さでした。当時動員で働きに出ている飛行場にも防空壕があり、空襲の際には避難しました。中に入ると不安になり危険だとはわかっていても、顔を出して外の様子をうかがったものです。そうするとすぐ近くの飛行機に乗っていたアメリカ兵数人が、身を乗り出して射撃してくるので葉莢がこっちに飛んでくるのです。熱くて、何より、怖くてたまりませんでした。

戦時中、あまり食べ物に困った経験はありません。母親の実家が食品製造をしていたこともあり、比較のお米も手に入りやすい環境でした。戦時中はすいとんや芋茎、きつま団子（きつまつこ）などを母親が用意してくれました。家の地下に涼しい貯蔵室があり、そこにはよく作り置きを保存していました。また、父親が千葉や新潟の方に行って何かしら買って来てくれました。男手が少ない中、近所の方がトラックを出してくれたり、皆協力して生活していましたね。母親は疎開に来た人の面倒を見ていました。

疎開先になるという点においても、青梅は比較的安全だったということですね。

戦時中親兄弟の安全を祈願する時には、この辺りの人たちは高水山によく行きました。

終戦のあの日、「これから何か天皇陛下からお話がある」とかしまって母親が言うのです。ラジオの音は私には聞き取れず、母親になんて言っているのと聞くと、戦争が終わったと告げられました。父親は戦争が終わって祝福ムードというよりは、悔しかったという気持ちのほうが大きかったと思います。

戦争が終わり、年頃だったのもあって編み物をはじめと
しているいろいろな事を習いました。品物が何もないから何でも自分たちでどうにかしなければならぬ時代でした。

戦争があった時代を知らない方と話をすると本当にそんなことがあったのか、なんて言われます。こんな風にお話ししても信じない人が多いですよ。経験した人でなければわからないことがたくさんあると思います。

東京都隣組会報 21号裏面 (八王子市郷土資料館提供)
急いで疎開をするように、東京都が呼び掛けた隣組会報です。
青梅も、本橋さんのお話にもありましたが、大勢の方が疎開してきました。

平和を願って

持 田 昌 治 九十二歳

青梅第一小学校を卒業後、戦前より自ら希望し十五、六歳で立川周辺にある陸軍航空技術研究所審査部に勤めていました。製造された陸軍の飛行機が図面通りにできているか、その飛行機が正常に動くかを確認・修正をする仕事です。機密情報を扱っていたこともあり、戦時中、立川駅から牛浜駅にかけての軍事施設は、外から見えないように車窓や駅周辺が黒く塗られ、暗幕が下ろされていました。

私が偶然、宿直当番になった日曜日に空襲爆撃に遭いました。審査部は、実際に空襲のある約一時間前に、B 29が飛来してくることを通知されます。その日の二十二時頃、B 29が近づいていると通知されましたが、恐らく今日はこの辺りは大丈夫だろうと予想していました。B 29の爆弾は機体から斜め四十五度前に落下する仕組みになっていて、自分たちのいる真上に飛行機がある場合は爆弾が降ってくる可能性が低いということを皆知っていたのです。最初

飛んできた飛行機は遠ざかり、後から来た飛行機は爆弾を投下、慌てて近くの防空壕に避難しました。上空から鈴旗を落とすと、正確な情報を相手に知らせないようにでき、またそれに火が点くと夜でも昼のように明るくなるので目眩ましにもなりました。空襲があると、衝撃波で目や服や内臓までも飛び出してしまうからと、目は押さえ、上着はズボンの中に入れてベルトを強く締め過ぎました。防空壕に入っているだけでも、それごと飛ばされてしまうのではないかと思うくらいの音、震動、爆風でした。

全ての飛行機が去ったのは二時間後、外へ出てみると避難した防空壕から五十メートル程先に爆弾が落ちていました。B 29の投下した爆弾は二百五十キログラム、百五十キログラムがあったと記憶していますが、そのサイズは一軒家に置いてあるようなプロパンガスくらいの大きさです。辺りは火薬のにおい、熱波、土埃、そして煙でできた雲で真っ暗でした。命の危険に晒された時、一番に頭に思い浮かぶのは家族のことです。もうこれで最後かもしれない、と何度も覚悟をしました。

空襲があつた後しばらくして、ほかの友人知人の安否を確認するため、保健所へ向かうと軍医が輸血をし、治療に当たっていました。手や足がない患者がたくさんいました。ガーゼなんてものはないので手ぬぐいを腕に巻き付け、どれだけの量が何時に輸血されたのかを直接書いていました。腕や足に直接針と管を刺し二百〜三百ミリリットル程抜かれると、体はもうフラフラでした。

幾日か経つたある日、今度は艦載機がやってきました。爆弾は、投下からしばらく時間があつて落下しますが、艦載機はものすごいスピードと量で目前に射撃してくるため、本当に恐ろしかった。青梅の射撃事件もこの艦載機の影響でしょう。戦時中は日々焼夷弾のようなものが飛び交っていました。間一髪当たらずに済みましたが、自分の身のと三十センチというところに弾が飛んできて、すぐ近くのと松の木に命中しました。その弾を今でも持っています。二十センチ程のサイズですつしりと重いのです。

疎開先である八王子の実践女子は、女学校だったので裁縫やお茶をするための畳の部屋も多く、そこに寝泊まりさ

せてもらっていました。それは記憶している限り、七月三十一日〜八月一日の朝にかけての空襲だったと思います。

やはりその時も宿直の日でした。何日か前に配られた宣伝ビラには『八王子、鶴見・横須賀周辺に空襲がある』という内容が書いてありました。夕暮れ時、立川から八王子へ職場の書類や必要なものをリヤカーで運び出し避難の準備をしていたところにB29がやってきました。上空を旋回しただけだったので、今日はもう空襲はないだろうと、中は深夜に自分の家に戻っていく者もいました。油断したところでした。八王子市内が一気に陽が当たったように明るくなりました。恩方、西八王子その辺りには陸軍幼年学校があり、そこが焼夷弾で銃撃されたのです。爆弾と違い音はなく一発の中に三十六本、電気花火の青白い光が無数に飛んでいる。安全な場所に逃げようにも、停電し、蚊帳の中は真っ暗で枕元に置いていた洋服も見えず、下着だけで近くのお寺まで避難しました。防火用水に分厚い毛布を持って行き、水浸しにしてそれに包まって熱から身を守りましたが、三十分もすればカラカラに乾いてしまう。そうす

ると涙腺まで乾き、目を開けていることも痛くてつらいのです。火の手が上がっている場所も多々ありました。何度消しても小さな火がそこから出てくるのです。家族も心配しているであろう、もう青梅に帰ったほうがいいのではないかと言われましたが、家に帰ろうと思ってもバスもなく、熱で溶けて歪んでしまった線路の上を電車が走るはずもありません。真つ暗闇の中、その線路の上をただただ歩くしかありませんでした。

井戸も水道もない中、浅川まで行き水を汲んできたけれど道中老人たちに「水をくれ水をくれ」と言われ、たくさん汲んできたはずの水はほとんど残っていませんでした。雨が降っても水溜りはできることなく、熱と火の気を帯びた町一体、下駄でない靴底は溶けてしまいました。町には至るところに何千体もの死者、白骨化した遺体、首だけがない遺体が転がっていました。こんな惨めな思いはありません。

それからしばらくして、マッカーサー元帥が来るからと飛行機の図面や書類を処分するように命令されました。あ

ちここで火が起こっている中それらを燃やす作業は熱くてたまりません。原爆が投下された時の新聞には『新型の爆弾が落とされた。白いものを着ていれば被害を和らげることができる。』と記載されていました。よく覚えています。

当時を振り返り思うのは、明日はどうなるかわからない。一寸先は闇です。だから食べ物でも物でも、お金を払って得るものは一つ一つ長く使い大切にしました。今は竜宮城に来たみたいに、食べきれないくらいたくさんのお食事が食べられて、とても豊かな時代だと思います。何でもあって便利な時代だけれど、日常的な小さな知恵を使って生活するということとは少なくなったように思います。

戦争経験者が少なくなっていく昨今、記録しか残らずドラマや映画で発信していくしかなくなると、本当の恐ろしさは伝えられません。これからの若い人たちに戦争が如何にいけないことなのかをわかってもらえなくなるのも、戦争を美化するような時代になっていくのも恐ろしいことです。戦時下を生きた人たちは皆口を揃えて平和を願っているのです。



陸軍航空技術研究所の仲間たちと（持田さん所蔵）



八王子空襲の焼け跡（八王子市郷土資料館提供）

持田さんから八王子の空襲の様子を伺ったときに、「八王子の町がみんな焼け落ちて何も無いのに、銭湯の煙突がポツンとたっていてねえ。」とお話をされていたその景色がこの写真です。

てい身隊や学徒動員で八王子の工場などで仕事をしていた青梅の方も多く、八王子空襲を体験なさったお話もよく伺います。

ちょっと想像してみてください。

焼け跡のくすぶった炎の中、凶面を燃やす若者の姿を・・・

雨が降っても水たまりもできない熱くなった土地で、水を求める老人の声を・・・

そして、この空の下、儚く消えていった尊い命を。

戦禍のふるさとを思う「ゆずり兼」に寄せてより

福島和夫 八五歳

青梅市は比較的戦災が少ない地域ですが、町や山間部には戦禍の傷跡がいくつか残っています。これは私自身が経験したことや、知人等から聞いたことごとを参考に綴ったものです。

昭和二十年四月、米軍のB 29爆撃機が柚木町の山中に墜落したことは、多くの方々の記憶に残る出来事でした。

横吹(二俣尾一丁目)の伊東庸行さん(当時高等二年生)達は、翌朝、墜落現場を見に行った帰りに、石神入り(二俣尾一丁目)の山中に落下傘のあるのを見つけ、その足で向かった林道で米軍兵士と出会い連行して駐在所へ引き渡しています。

同じ四月末の朝九時過ぎのこと、B 29爆撃機が投下した爆弾が平溝の榎峠の阿部直一宅を直撃、家は全壊して焼失。幼い子を含めた五名が亡くなるという痛ましく悲しい出来事が起こりました。ふるさとが受けた唯一の戦災です。

この日、阿部宅の前を通りわずかな行き違いで危うく難を逃れたという同じ集落に住む青木明次氏は「家に帰り着

いて間もなく、物凄い轟音と地響きがして家が大きく揺れた。咄嗟とっさに〃爆弾が落ちた〃と音のした方角へ行くと、爆弾の直撃を受けた阿部宅が完全に潰れ火に包まれていた。

近所の人たちはバケツリレーで消火に努め、消防団も出動して消火活動に当たっていた。火災が収まった焼け跡には、幼い二人の女の子が変り果てた姿となっていて、直一さんの奥さんと妹さん、それに阿部耕一さんの娘さんを合わせ五名が亡くなった」と当時を回想されている。爆心地近くに住む私の同彼生は「空襲警報のサイレンが鳴ったので妹を連れやっとの思いで防空壕へ避難したその時、例えようのない大爆発が起こり、体の震えが止まらなかった」。

また、阿部宅に近い小山俊三氏は「爆弾が落ちた時の衝撃の物すごさは生きた心地がしなかった。阿部さんの家の傍にあった大岩が粉々に砕け散っているのを見て、爆弾の威力に驚いた。家の時計も落ちた衝撃で九時十五分を指して止まっていた」と話された。

それから二十二年後のこと、陸上自衛隊第一師団武器課の調査によって、この時投下された爆弾のうちの一発が不発弾として現場に近い山林の土中深く埋まっていることが

判明し、これを取り除くため、昭和四十二年一月三十一日に準備が始まり、翌朝から発掘作業が進められた結果、午後四時過ぎに不発弾が見つかりました。信管を外し安全が確認されて処理作業が終了しました。

終戦間近い八月十一日の小雨が降る夕方のこと、日本軍重爆撃機「飛龍」が沢井の上空を通過した後、「櫛かんざし美術館」の東側を流れる阻端沢上流の山頂付近に墜落し、乗組員十二名全員が戦死しました。即清寺で営まれた葬儀の日が終戦の日でした。四月に、柚木町へB29が墜落したことは誰もが知っているのに、同じ地区内に墜ちた日本軍の「飛龍」は戦時中のことで秘密扱いにされていたため、知る人は少ない様です。当時は私も知りませんでした。昭和二十三年中学一年生の夏、同級生に誘われて墜落現場へ残骸を見に行きました。その帰りに、小さな墓標が立つ土塁の上で子兎が飛び跳ねながら遊んでいた情景は未だに忘れることが出来ません。

戦争が激化するにつれ金属類は不足し、飛行機の燃料も海外からの補給が難しくなりました。不足する金属類を補うため国から鉄材の供出を求められ、御岳登山鉄道(株)で

は、ケーブルカーの線路等の鉄材を、三田村村営の温泉「溪の湯」では、源泉井から四百米に及ぶ給湯用鉄管が、海禅寺・雲慶院・寒山寺等の寺院では釣鐘を、この他、機織りの織機なども国の求めに応じ供出しています。

燃料は止む無く、松の根に合まれている油を抽出して航空機用の燃料とするため、昭和二十年、軍は沢井上分鶴石(沢井三丁目)に松根油製造設備を造り、村の人々は動員されて松の根等を掘り取るため山に入ったといっています。

また、青梅市には戦火を逃れて多くの方々が疎開して来られました。

文化勲章を受章された日本画家の川合玉堂氏、文豪の吉川英治氏、彫刻家の朝倉文夫氏の他、童謡の作曲家佐々木さぐる氏といった文化・芸術の著名人をはじめ、沢井の雲慶院には浅草の浅草寺や大倉集古館所蔵の貴重な文化財が疎開し、学童疎開でも多くの児童が来村、御岳山の家々をはじめ寺院等に入りましたが、他にも親戚や知人を頼り多くの人々が疎開して来ています。

終戦の日は、学校が夏休中でしたが全校招集日で、登校すると、重大な放送があると職員室の前に先生も生徒も全

員が並んでラジオから流れる天皇陛下の『終戦の詔勅』を聞きました。記憶に残る忘れられない出来事です。

終戦前後の数年は食べる物も物資もなく、困窮した生活が続きました。国民に等しく食料が渡るようにと食糧管理法(昭和十七年)が制定されましたが、混乱した世情は続き、疎開していた私の同級生(当時四年生)は弁当を持たずに登校、昼食の時間になるとそっと教室を抜け出し水道の水を飲んで飢えをしのいでいたのを思い出します。

食糧管理法は暮らしの基盤となる食料を、誰もが等しく分け合い安心して生活できるようにと制定されましたが、この法律制定にあたり、郷土の先人、片柳真吉氏が農林省において中心的な役割を果たされています。

今日の平和は、先の大戦で払われた多くの尊い犠牲の上に築かれていることを忘れてはなりません。さらに、戦後の食糧難や物資の乏しい中で肩を寄せ合い、助け合って苦難の日々を乗り越えてきたことを思うとき、改めて平和の尊さを実感します。これらの事を決して忘れることなく、次の世代に語り継ぎ、戦争のない平和な日々が永遠に続くことを心から願っています。



(上) 金属を買い上げる東京府からの文書
(八王子市郷土資料館提供)

(下) 貝杓子 (青梅市郷土博物館所蔵)

戦時中、家庭で使われていた台所用品も供出対象であったため、金属のお玉の変わりに貝杓子が使われていました。

あとがき

終戦から七十五年の月日が経ち、戦争体験者が少なくなつてまいりました。今回発行させていただきました「戦後75年未来を生きる皆さんに私たちが伝えたいこと」戦時中の生活から学ぶ」は、昭和・平成・令和と戦後の日本の復興を支えてくださった皆様から、これから生きる皆さんに、戦争とはどのようなものだったのか、平和の大切さとは何かをテーマに、聞き取りさせていただいた内容をまとめたものです。

空襲後の焼け野原の映像や多くの方が亡くなって横たわっている写真、防災頭巾や焼け焦げの有る軍服など、戦争に関連する資料は、機会あるごとにご覧になっているかと思えます。今の平和な日本では、これらの記録が七十五年前の日本の姿であることが身近なものに感じられなくなつてしまっていることも、致し方ないことかもしれません。本誌では、皆様のお話から、その時の様子が少しでも感じ取っていただきたく、関連する写真を掲載させていただきました。

その日を生きぬくことさえ必死な日々を、家族との絆、仲間との信頼と友情、知恵と工夫で乗り越えられてきた皆様のお話の中には、今をそして未来を生きる私たちに改めて命の尊厳について問いかけられているのではないでしようか。

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、緊急事態宣言も発令されました。自分自身を守るため、大切な人を守るため、今を生きている人々が皆で命を守る努力をします。

戦争は、人が人の命の尊さを見失ってしまう、この先の未来あってはならないことです。命の尊さについて、今一度自らに問いかけていただくきっかけに、本誌がなれば幸いです。

本誌編集にあたり、御協力いただきました、多くの方々
にこの紙面をお借りして心より御礼申し上げます。

平和が永遠に続くことを祈って・・・

青梅市 市民安全課

戦後75年

未来を生きる皆さんに私たちが伝えたいこと

～戦時中の生活から学ぶ～

令和3年3月発行

発行・編集 青梅市役所市民安全課

青梅市東青梅1-11-1

電話 0428-22-1111

印刷 株式会社 成和印刷